

理論編  
実践編

宇宙意識という視座

# Dr. for the Earth

地球のお医者さん

平井孝志

オーガニック農法・農業編・畜産編

オーガニックで健康ライフ

## 生命の系

循環と共生の根理

科学と経済の陥穽

## 物質の系

第二部  
實踐編



## 企業力でオーガニック栽培成功

株式会社  
ドゥマン

一房のプチヴェール

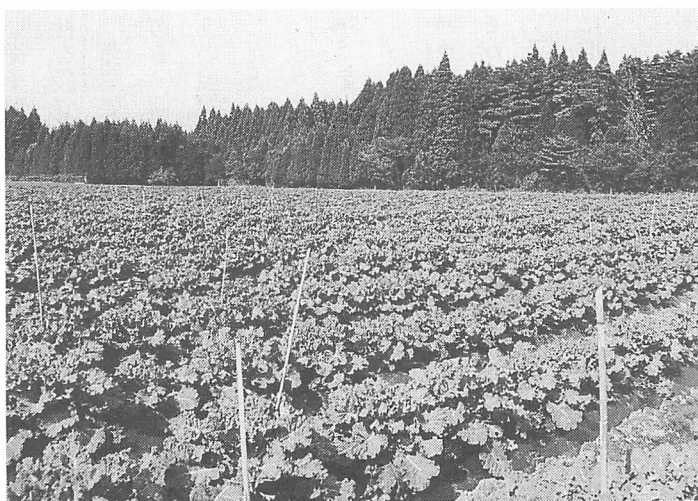
一枚の葉っぱからでも

私たちの熱意が伝われば

### 全員参加の農業めざす

インターネットを探検していると、有機無農薬の食品や加工品を専門に扱うホームページに出会う。そのうちの一つ、「オーガニック・サイバー・ストアー」(<http://www.organic.co.jp>)は、安心できる食品や商品を専門に扱い、一九九八年九月末の開設より大好評で、最近では月間二五万件にも及ぶ来訪者を記録している。

この人気ホームページを管理運営しているのが、株式会社ドゥマン。同社は農場を持ち、夏は



大自然の中で育つプチヴェール。もちろん無農薬無化学肥料栽培だが、虫害は少ない

モロヘイヤ、冬はプチヴェールを中心に有機無農薬無化学肥料栽培をしている。いずれも関東・東北地方の百貨店や高級食品店から高く評価され、予約に応じきれないほどの受注を得ている。

同社の池田建一社長、大和田忠副社長（下館農場担当）、松田敏幸副社長（いちほごま一迫農場担当）にお会いし、これまでの苦労や成功への道のりなどを伺った。

同社を設立したのは、精密部品加工工場を経営している兄弟会社。年々小さくなる一方の精密部品に対し、製造や検査にあたる人間は、ベテランになるまでにはいいが、年老いてくると、細かいものが見えにくくなったり、手先がおぼつかなくなってくる。「もっと働きたい」という意欲をもちながら職場を去らなければならな

い従業員もいた。そこで従業員と会社が話し合った結果、「全員参加の農業」を目指して新会社を設立することになった。そうして誕生したのが株式会社ドウマンだ。

農業であれば、少々の老眼や手先の不自由さも関係ない。周りを見渡せば休耕地もたくさんある。「農業をやるなら、無農薬有機栽培にこだわろう」ということになった。しかもリストラの嵐が吹き荒れるこの不況下に、本人が希望すれば働きたいだけ働ける、定年のない会社にしたというのだから、驚かされる。

ドウマン東北支社があるのは宮城県一迫町。東北新幹線「くりこま高原駅」から車で約一五分。支社から車で五分ほど走れば、田んぼの真ん中に大型ハウスが現れる。

ハウスは全自動装備で広さは二反。ほか同町内に計六反の露地、本社のある下館市では小型ハウス二反と、合わせて初年度に合計一町もの面積を確保して栽培を始めた。しかし会社には、モロヘイヤにかける情熱以外には、誰も農業の経験がなかった。

「挑戦でした」という。リスクの少ない小規模から始めるより、さまざまな土地や畑で一度に取り組み、それぞれの栽培のパターンをつかもうという大胆な発想だった。

なるほど、農場を確保した各土地の気候では、モロヘイヤは一年に一作しかできない。一カ所で一〇パターンの栽培方法を試すだけでも一〇年かかるが、それを一〇カ所で実施すれば一

年で済む。さらに小規模より大規模の方が信頼性の高い結果が得られる。

「精密部品でもそうですが、一個の完成品（良品）ができたからといって、二個目から一〇〇個目まで全て同じ完成品ができるとは限らないのです」

無謀な挑戦ではなく、そこには大胆かつ冷静な経営判断があり、部品メーカーとしての経験とノウハウが生かされていた。気になるのはその結果。単刀直入に聞いてみた。

「二年目は無我夢中でした。初めてのことなので一から十まで段取りが悪くて……。それでも何とか収穫はできました」

しかしそれからが大変だった。

**全滅、植え替え、再び全滅……**

二年目に一迫の大型ハウスがダニで全滅。幸い定植後間もない時期だったので、再度、苗を調達して、環境整備や土地改良の指導を受けながら何とかしのいだ。しかし三年目はもっと悲惨だった。下館のハウスも一迫のハウスも全滅したのだ。

下館のハウスは人為的ともいえるミスが原因だった。五月のある日、季節外れの大寒波でも寒い朝を迎えた。昼には全員出席のイベントがあるため、社員がハウスの出入り口はもち



ブチヴェールは、茎からの新芽を食用にする

ろん、保温用の小さなトンネルハウスまで全て閉め切って出かけた。

モロヘイヤはシナノキ科の多年草。東地中海の原産といわれ、旧大陸の熱帯で広く栽培されている。寒さに弱く、ハウスの戸を閉めた判断に間違いはなかった。しかし不幸はその後にやってきた。昼には真夏を思わせるような暑さになり、離れていたイベント会場から社員が慌ててハウスに戻ると、中はすでにサウナ状態。収穫を一週間後に控えての悲劇だった。一迫の方は、土の中に住む害虫のネコブセンチュウにやられた。

「ショックでした。高温で溶けてしまった無惨なモロヘイヤを前にして、ただ茫然と立ちつくす者、悔しさに絶えきれずハウスを揺らす者、

男泣きしながら倒れたモロヘイヤを起こしている者。一人ひとりが自然の怖さ、自分たちの無  
知さ、野菜作りの難しさを体験するには、あまりにも大きな出来事だったような気がします」  
無農薬への挑戦は、どこでも虫や菌の強烈な洗礼を浴びる。ほとんどの人はそれで無農薬へ  
の壮志を捨ててしまう。しかしドゥマンはそうではなかった。

代償は大きかったが、得たものも大きかった。「一人減り、二人減りと去っていく人間が出  
るのではという不安がありました」というが、現実は逆で、中には「野菜の話し声が聞こえる  
気がする」という者まで現れていた。だから、先の経験を通しては「素人集団の自分たちが、  
こんなにも野菜を愛し、これほどまで農業に熱意を注いでいたのかということに気づかされ、  
お互いの情熱に敬意を払うことで、団結心がより強固になった」という。「元のハウスに戻そ  
うよ」という声が誰からともなく上がった。

その言葉で我に返った企業人たちは、役割分担を決め、すぐさま苗の確保に東奔西走した。  
全滅の翌日には定植が完了するという、疾風怒濤の再挑戦が早くも始まっていた。

同社の立ち直りの勢いを見て、ある農家の人は次のように言ったという。「さすが企業、や  
ることが神業だね。私らだったらショックで首吊りだよ」

病害虫には農薬散布をと考えなかったのだろうか。



「農業を使いたくなる気持ちは痛いほどわかりました。全滅しては苗を買いに走り、植え替えという作業を何度繰り返し返しても利益は上がりません。でも当初から農業を使う気はありませんでした。大言壮語のスタートだったものですから、周囲のプロから見れば初心者マークの自動車を見るような気持ちだったのでしょう」

被害が発生すれば、「良い農業があるよ」「無農業で野菜はできっこないよ」「遊び半分で農業しているんだからうらやましいよ」と、皮肉まじりの叱咤しつた激励を受ける。素人には素人の意地があると思うものの、解決策が見つかったわけではなかった。意地を通すにも、情熱を持ち続けるにも、あとひと押しが足らなかつた。

### 自然学との出会いから決断へ

品質管理には知識も経験もある。実際に無農業で収穫している人もいる。自分たちの直面する問題には必ず原因と解決策があるはずだった。だがそれがわからない。わかるためには、農業に関する知識も経験も少なすぎた。薄々感じていたことはあった。それが正解であったとしても、代替案がない。本を読みあさり、各地の講演会にも足を運んだ。そんな中で平井孝志に出会った。

「平井先生の講演を聞いたときは、全身に閃光を浴びたようで心が震えました。宇宙の摂理、生命の系、水の話、ミネラルの話、微生物の話、堆肥の話。もっと聞いてみたい。私たちのモロヘイヤ栽培の話もしてみたい。そうしてお客様に喜んで召し上がっていただけるようなモロヘイヤが作りたいと切に願いました」

そろって講演を聞いた大和田・松田副社長は、翌日、偶然にも平井孝志と名刺を交換する機会を得る。早速、「是非とも」と話を切り出した。

農業を始めたいきさつ、施肥、管理、全滅したモロヘイヤの話、そして前日の講演についての質問など。ひざを交えての懇談は数時間に及んだ。自然学という総合的な見地からの説明を改めて聞いたことで、二人は納得も得心もできたという。

例えばこんなことも聞いた。

農場がまだまっさらの頃。開墾したばかりなので肥料を入れたいと考えた。でも何をどれくらい入れたらいいかわからない。そこで近くの農家の方から、毎春、地元の養豚場から肥料をもらってきていると教わり、その養豚場を紹介してもらった。

「その農家の方がおっしゃるには、一反当たり軽トラック一〇杯分の豚糞尿を入れると言うんです」。よくあるように軽トラックが過積載で走るとして、一〇杯分でざっと五トン。ちょっ

と多いのではないだろうか。「そう、私も一〇杯は多いと思いましたが、六杯にしたんです」と笑う。

「平井先生にお伺いすると、やっぱり多い。それにナマは論外ということでした」。薄々感じていたことをズバリと言われ、納得できたという。代わりにサンバースやミネリオン7などの資材の活用を提案された。全部合わせても一反当たり一トンにもならない量だった。思わず尋ねた。「そんなに少ない量で育つんですか?」。返事は、大丈夫、ということであった。

センチュウの予防については土作りのアドバイスを受けた。実際にそのとおりにしてみると、被害が減った。そんな実例は山ほどあるという。

本社に帰った大和田・松田両副社長は、興奮冷めやらぬ様子で、講演とその後を受けた助言のことを池田社長に報告した。

池田社長も、モロヘイヤ栽培を開始してから毎日、農場通いを欠かさない。モロヘイヤの「顔色」も自ずとわかるようになった。しかし、微生物だ、熟成だと言われても詳しいところにはわからない。実際に現場や資材を見たわけでもない。わからないが、決断をしなければならぬ。「二人がそれだけ良いと思ったのなら、全農場に使用してみよう」というのが社長の結論だった。テストもなく、いきなり下館と一迫の農場全てでアドバイスどおりの農法で栽培し



青々として艶のあるモロヘイヤ

てみようということになった。

今でこそ「野菜の王様」と呼ばれ一躍有名になったモロヘイヤだが、同社が栽培を始めた当時はそれほどでもなかった。そのモロヘイヤ栽培の方針を打ち出したのが池田社長であった。

いくら先見の明があるとはいえ、それまでこの誰とも知らなかった人物の言葉を信じて、合計一町もある畑の農法を一気に変えられるものだろうか。池田社長の答えは単純明快だった。「私には詳しい内容はわからない。それでも、二人とも熱っぽく話すんだ。専門用語なんて聞いてないよ。言いたいことは一つだった。やらせて欲しいではなくて、やる気だったこと」  
例えば農場の半分だけ、あるいは小型ハウス一棟だけで始めてみるといった選択肢は考えら

れなかったのだろうか？

「考えても一緒だよ。その前の年は下館も一迫も、理由はどうあれ、全滅したんだから。信じた方法でやってみて、それで全滅しても、結果は前年と同じ（それ以上悪くなるわけではない）」豪放磊落（うはいやく）というのだろうか。大胆不敵（たんだんふてき）というのだろうか。確かにそう言われればその通りだが、もし私が社長であったなら、即断即決はできなかったろうし、ましてや「全部でやろう」なんてとても怖くて言えないだろう。

「二人を信じてる。その二人が信じたことは俺も信じる。信じて、行おこなったら、解る。疑って、解るまで聞いて、納得できたら行ってみようかなあなんてやっていたら、一生何もできない」ドゥマンはこの年を境に止めどもない勢いで業界を席卷していくことになる。

### 受注倍増し、JONAの認証も

思い切った農法の転換と各種資材の効果は如実に現れた。

「その年の収穫は見事でした。葉は厚いし、莖は太いし。素晴らしいモロヘイヤだと各方面から評価をいただきました。モロヘイヤに関して右に出る者はいないという方からは、こんなに素晴らしいものは見たことがないとお褒めいただきました。可憐な姿を『お姫様のように』

と仰っていただいたこともあります。また、冬のプチヴェールは、糖度も一六度以上あり、市場で引っぱりだこに。「来年の作付けは倍以上にしないと追いつきません」

プチヴェールとはフランス語で「小さな緑」という意味。結球しないメキャベツという野菜だ。相前後して、日本オーガニック&ナチュラルフーズ協会（JONA）の存在を知りすぐに入会、オーガニック認証の申請をした。農場開設以来、断固として人造合成物を拒否し続けてきたので、申請書に記載する栽培方法も自信をもって記入できた。ほどなくして同認証を得た。いくつか疑問をぶつけてみた。まず、病気は出たのだろうか。

「全くないと言ったら嘘になります。ハウスの中で何本かは植え替えました。それが、病気のせいなのか、苗自体の弱さなのかはわかりませんが。苗自体の不具合というのも少なからずあるんです。同じ施肥、同じ管理をしていても、時々ですが、育たない苗があるんです。それをわれわれは苗の弱さと呼んでいます」

土に住む害虫（センチチュウ）は？

「それが、こうなんです」と、分析成績書を示されながら説明を受けた。「全滅したときは一〇〇グラム当たり三八二匹いたものが、二七匹に減ったんです」。ざっと一〇分の一以下にまで少なくなっていた。

「モロヘイヤは太陽を好みます。ガラスハウスのガラスで遮断されるある波長の紫外線不足が原因で、生理障害を起こすことも解ってきました」

難しい単語や栽培方法が次々と口をついて出てくる。複数の会社の役員を兼任する副社長という肩書だけでなく、現場に密着して自ら汗を流しているということがわかる。

決断力と実行力を持つドウマンは、世間でいう定年を過ぎた人々を含めた全従業員で創っている会社だ。現在まで培ってきた信用は、「コスレタス」や「ベビリーフ」を始め、数々の栽培の受注につながっている。

気がつけば栽培面積は当初の五倍になった。しかしそれでも足りない。翌年の栽培面積をさらに五倍にしても全ての要望に応じきれないという。

「安全で美味しいものを召し上がっていただきたい。それと同時に、一房のプチヴェールや一枚の葉っぱからでも私たちの熱意が伝わればと思います」

その素直な気持ちと勇氣ある決断となり、一見非常識とも思える行動を呼び起こす。そして農場からは「安全で安心して食べられる本物の野菜」が出荷されていく。誰もが知りたい成功の奥義、その一端をかいま見たような気がした。

## ご注意

- 1 掲載文書は執筆時の生データを基にしていますので、推敲を経て実際に出版された文章とは若干違う場合があります。悪しからずご了承下さい。
- 2 リンクはどのページでも確認不要です。
- 3 商品宣伝・商用目的の引用についてはお断りする場合があります。
- 4 本サイトに掲載されている記事・コラム・解説文・写真・その他すべての無許可転載を禁止します。あらゆる内容は日本の著作権法及び国際条約によって保護を受けています。